

行政医師として6年目、保健所長として3年目となりました。「新しいことにチャレンジしよう!」と、臨床とは違う行政というフィールドに飛び込みました。今回は貴重な機会をいただきましたので、これまでに振り返ってみたいと思います。これから行政医師を目指す皆さんの参考になればと思います。

臨床から行政へ

大学卒業後は外科医として働きました。外科医ですので、がんの診断・治療に多く携わってきました。臨床ではどうしても「病気を治す」ことが最優先であり、そのために最新の検査・治療・技術を学び実践していくことが仕事でした。もちろん患者さんは治る方ばかりではなく、そのため緩和ケアや医療機関での看取りなども行ってきました。しかし、患者さんの自宅での生活やQOLについては、まだまだ不十分だったのではないかと今は思います。がんになっ

て、たとえ完治したとしても、再発するんじゃないかという不安が一生付きまといまいます。病気が方が治って自宅に帰っていくと良かったなと思っていました。でも、そもそも病気になる方がより良いのではないかと思うようになりました。また、若いがんの患者さんに対する社会的な支援が少ないという思いもありました。目の前の人を治療するだけでなく、「もつと何かできることがあるんじゃないか」と新しいことにチャレンジしてみよう!という気持ちから、行政の道に飛び込みました。

保健師さんと会う機会がありました。「保健所に関わってもらおうこと、良いものができた。医療機関との連携もスムーズになり良かった」という言葉をいただき、本当にうれしく思いました。

保健所長になって

入庁4年目になり、長崎県の島原半島を管轄している県南保健所の所長となりました。自分としてはまだ早いという感覚で、重責に戸惑いが大きかったです。また、医師一人の職場で判断に悩んだときは、先輩方に電話で相談することもあり「頼れる上司がいることは幸せだな」と切実に感じました。初めての仕事をなんとかこなしている中でも、臨床での経験、県央保健所での経験がとても役に立ったと感じています。

そうこうしているうちに、新型コロナウイルス感染症の対応が始まりました。高齢化が進んでいて、医療資源も限られているこの地域で、どのように協力体制を取るのか…。何度も地域で話し合いを重ね、試行錯誤しながら、つくり上げていきました。

保健所での経験

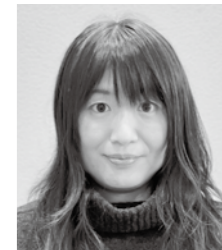
入庁後は長崎県県央保健所の行政医師として配属されました。地域包括ケアシステムの構築が強く進められていた時期でしたが、当時の私は「地域包括ケアシステムって何ですか?」という状況でした。地域で開催された多職種研修会では、参加していた方々から「医療は敷居が高い!」と言われて、大変驚きました。医療機関で働いていた時は、そのようなつもりは全く意識したこともなかったように思います。研修会以外でもさまざまな機会に地域の方の同じような声が聞かれ、地域と医療には大きな壁があるのだなということを実感しました。医療現場の経験がある私たち行政医師が、「両方の立場を理解し、つないでいく」という役割を担っていかないといいな」と強く感じました。

そんなコロナ禍の中、令和2年の熊本県豪雨災害では、長崎県DH EATの一員として人吉保健所の支援に向かいました。初めての被災地で、振り返ればあまり何もできなかったように思いますが、災害を目の当たりにし、被災地で何ができるかを考えながら活動しました。これまでDH EATの研修や訓練を受けていたことは、実際に被災地で活動することとは何物にも代え難い経験であったと思います。また、受援についても考える機会となりました。支援に行った人たちから意見を聞き、今後の訓練に取り入れながら、長崎県の体制を整備していきたいと考えています。

おわりに

「保健所の仕事って何してるの?」と、転職したころはよく聞かれましたが、今は保健所といえれば新型コロナウイルスの対応をする機関とされます。さまざまなお意見をいただきますが、保健所が地域を守っているという思いを忘れずに頑張りたいと思います。

また、社会医学系専門医制度が始まり、長崎プログラムも作られました。私が記念すべき長崎プログラム登録第1号となり、研修がスタートしました。先輩方の温かい指導の下、なんとか研修を終え、専門医を取得することができまし



長崎県南保健所長
川上 総子

平成14年長崎大学医学部医学科卒業。外科医としての勤務を経て、28年長崎県に入庁。長崎県県央保健所に配属。31年より現職。

県央保健所では、「入退院支援連携ハンドブック」の策定に携わることができました。協議を始めるに当たって、医療機関や介護関係者に、入退院時の連携について課題とされていることを実際に聞いて回りました。ここでも「連絡が取りにくい」「誰に連絡していいのかわからない」「急に退院となって困る」「情報がもらえない」などさまざまな声がありました。ハンドブックの作成には、医療関係者と介護関係者の代表者と一緒に協議を進めていきましたが、ここでもさまざまな議論があり、地域の抱えている課題を話し合う場となりました。

速やかな連携を図るには、お互いについて理解を深め、同じ方向を向くことが重要であると感じました。この経験は大きかったです。と思っています。ハンドブックができて3年後、一緒に協議した市の

た。指導医を目指すとともに、これからプログラムに登録する先生方に経験談などをお話ししながら還元していければと思います。

大変なこと、悩むこともありましたが、「みんなの健康を守る」やりがいのある仕事ですので、初心を忘れず楽しみながら、新しいことにもチャレンジしていきたいです。まだまだ保健所長としては駆け出しで、日々学ぶことが多いのですが、これまでいろいろな方に支えられてなんとかやってこられました。これまでの素晴らしい出会いに感謝し、地域との懸け橋になりたいと思います。

